

# 平成 19 年度 課題研究成果報告書

平成 26 年 4 月 1 日現在

研究種目： I

研究期間：平成 18 年～19 年（2 年間）

研究課題名：介護予防における作業療法の効果  
－ 活動パスを用いた作業療法・活動システム －

研究代表者

氏名：大嶋 伸雄

所属：首都大学東京大学院

会員番号：3508

研究成果の概要：

本研究は、高齢者の活動選択と継続への援助的实践に役立てるための手段と方法を「活動パス」と定義し、高齢者の活動を根付かせるためのシステムとして実用化することを目的とする。作業療法士による介入施設 A ならびに統制群となる非介入施設 B の高齢障害者、計 26 名（男性 14 名、女性 12 名）を対象とした。結果、作業に関する自己評価・改訂版（OSA2）で統計的な有意差が生じ、「活動パス」による評価では、介入施設 A では活動項目数が徐々に減少して活動そのものが絞り込まれながら遂行満足度が徐々に上昇したが、非介入施設 B では、活動項目数に変動が多く、遂行満足度も低い状態が続いた。

助成金額（円）：1,848,100 円

キーワード：（活動パス）、介護予防、作業療法、効果研究、高齢者

## 1. 研究の背景

現在、地域高齢者に対する健康増進のための様々な試みが実践されている<sup>1,2)</sup>。通所施設などで行われているパワーリハビリテーション（以下、パワーリハ）やその他の基礎的運動能力の維持向上訓練に励む通所高齢者には、そういった一次的なフィットネス効果で運動・代謝機能が改善することによって意欲も向上し、いわゆる行動変容の手がかりを得ている者が多い。その結果、高齢者の健康行動に対するレディネス状態を、さらに次の「活動」へ結びつけていくシステムと運用のための方略が必要となっている。

作業療法士（以下、OTR）がそうした高

齢者の活動に対する意欲を意味のある活動とその成功体験に導き、個人的な価値と興味に基づいた作業活動を継続的に提示して選択させることができれば、それは介護予防の有効な手段となる。そのために OTR は Health Practitioner（健康づくりの専門家）または Consultant Practitioner（健康問題の専門家）として、対象者の個別運動能力や認知機能、興味、価値、個人的原因帰属などを明らかにして継続可能な活動を対象者に認知させるべく具体的に提示しながら、あくまで対象者の主体性に重点をおくコンサルタント業務としての過程が必要となってくる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、高齢者の活動選択とその継続への援助的実践に役立てるための手段と方法を「活動パス」と定義し、高齢者の活動選択および地域生活レベルにおける活動を根付かせるためのシステムとして実用化することにある。今回は、そのための初段階として高齢者の自主的活動選択の効果を検証する。

### 3. 研究の方法

1) 研究デザイン：本研究は2つの施設の対象者を実験群と対照群に無作為に分けて介入前後の効果判定を実施する群間比較研究である。

2) 対象：G県とT県の2つのデイサービスを利用している要支援から要介護度1レベルの高齢障害者で、パワーリハを3ヶ月以上行っている26名（男性14名、女性12名：年齢 $69.7 \pm 10.4$ 歳）を対象とした。OTRが介入する施設A（男性5名、女性7名：年齢 $69.4 \pm 10.7$ 歳）および統制群としての非介入施設B（男性9名、女性5名：年齢 $70.1 \pm 10.3$ 歳）において対象者の属性による差はみられていない。

3) 研究の手続き：3ヶ月間の研究期間（平成20年6月～9月）の前後、運動機能、バランス能力、認知機能評価に加えて、高齢者版興味チェックリスト、役割チェックリスト、作業に関する自己評価・改訂版（以下、OSA-II）<sup>3)</sup>を実施した。また、「活動パス」の評価項目である「選択された作業活動（最大7まで）」と、その活動の「重要度（1～5段階：とても重要、やや重要、どちらでもない、あまり重要でない、全く重要でない）」および「活動遂行満足度（1～5段階：とても満足、やや満足、どちらでもない、やや不満、全く不満）」について、2週間おきに対象者との個別面談形式で各自の活動を振り返ってもらった。また、2週間おきに「入れ替わる活

動項目」には、各活動の重要度の順に「5→4→3→2→1（点）」が加算され、多く項目が入れ替わることで点数（絶対値）は増加することになる。この数値を「重要度変更率（1/10）」と定義し、その値が少なければ期間内における活動内容が安定していたことを意味する。なお本研究では、得られた全評価結果のうち、基本的属性に関する結果とOSA-IIおよび「活動パス」の評価項目を分析対象とした。

3ヶ月間の介入期間中、施設Aでは様々な活動形態を考案するためにOTRが活動と健康増進における主旨説明を行い、集団での話し合いから開始して、施設内でのレクリエーションの企画・実践などから徐々に個別活動へ移行し、カウンセリングツールとして「活動パス」を用いながらOTRが個別活動をサポートした。施設Bでは対象者の自主的活動をみまもりながら活動パスにおける評価だけを実施した。

4) 倫理的配慮：2施設における研究対象者は、ポスター掲示による募集へ自主的に応募し、かつ研究説明文書に同意した者のみを対象とした。なお本研究は、日本作業療法士協会学術部課題研究倫理審査委員会の承認を得て実施している。

### 4. 研究成果

研究期間の前後、施設Aおよび施設Bにおけるそれぞれの評価でいくつかの統計的有意差が生じた。OSA-IIでは「自分について項目群（STEP-1）」のうち、施設Aの7項目で有意差がみられたが施設Bは1項目、同じく「自分の環境について（STEP-2）」では、施設Aで2項目、施設Bで1項目であった。OSA-II全体を通じて、全般に施設Aにおける評価点が高い傾向を示した。また、「活動パス」による評価の結果、OTRが介入した施設Aでは活動項目数が徐々に減少する傾向

を示しながら、活動遂行満足度が徐々に上昇したが、非介入の施設Bでは、活動項目数の変動と変更率の上下が続き、活動遂行満足度も徐々に低くなる状態が続いていた。

今回、OTR が介入した高齢障害者自身による活動選択を基盤としたヘルスプロモーションプログラムでは、評価-介入プロセスの援助形態を「活動パス」で表すシステムモデルがその有効性を示したと考える。たとえ基本的な運動遂行能力や知的・認知機能、そして活動を行うための生活環境などが備わっていたとしても高齢者の行動変容では困難さを伴う場合が多く見受けられる。しかし、今回の「活動パス」のシステムモデルでは高齢障害者の活動内容とその重要度、活動変更の過程などを対象者自身が視覚的に振り返る機会 (reflection) を持つことで、より客観的な自己評価が実現したと考える。とくに対象者の活動における課題と詳細な状況、周囲の環境や地域における利用可能な資源を感覚的に捉えて他者と比較し、自身が実行可能と判断するためのツールとして有効であった。一方で、施設Bのように「活動パス」の自己評価部分のみを用いても、OTR による行動療法的な振り返りの助言と考え方を促す介入がなければ、施設Aのような結果が得られない事実が明らかとなった。よって、今回の「活動パス」によるヘルスプロモーションプログラムを基盤として、今後 OTR が高齢者の活動選択におけるコンサルタント活動を積極的に推進する手段の一つが示唆されたと考える。

## 5. 文献

- 1) Mandel DR, Jackson JM, Zemke R, Nelson L, Clark FA : lifestyle Redesign. AOTA Inc, Maryland,1999.
- 2) 川又寛徳, 山田孝, 小林法一: 地域で生活する健康な高齢者に対する健康増

進・障害予防作業療法プログラム (65歳大学) の効果に関する予備的研究. 作業行動研究 14 : 25-32, 2010.

- 3) 小林法一, 山田孝, 川又寛徳, 石橋裕, 石井良和: 予防的作業療法プログラム参加者における「作業に関する自己評価・改訂版」の内部妥当性〜ラッシュ分析による検討〜. 作業行動研究 14 : 33-40, 2010.
- 4) 佐藤晃太郎, 山田孝, 石井良和, 鎌田樹寛: 高齢者の作業活動における自己効力感に関する一考察. 作業行動研究 11 : 1-9, 2007.
- 5) 鈴木ひろみ, 山田孝, 小林法一: ADL が自立している在宅脳卒中患者の自信とその間連要因の検討. 作業行動研究 13 : 137-149, 2009.

## 6. 論文掲載情報 (現在投稿中)

### 7. 研究組織

#### (1) 研究代表者

氏名: 大嶋 伸雄

所属: 首都大学東京大学院

会員番号: 3508

#### (2) 共同研究者

氏名: 山田 孝

所属: 目白大学・大学院

#### (3) 共同研究者

氏名: 小林 法一

所属: 首都大学東京大学院

#### (4) 共同研究者

氏名: 望月 秀樹

所属: 杏林大学

#### (5) 共同研究者

氏名: 下岡 隆之

所属: 帝京平成大学